
「海の生き物を守る会」メールマガジン No.45

2009.8.16 (日)



Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今日の海の生き物」 ヒカリウミウシ *Plocamopherus tilesii*

フジタウミウシ科に属する比較的大型のウミウシである。とくに発光するウミウシとして有名。水中を泳ぐウミウシとしても知られる。体をくねくねと動かして水中を漂うが、泳ぐという感じではない。発光は夜間など泳いでいるときにほのかに発光しているのが見られるが、顕著な光ではない。コケムシを食べると考えられており、幼体がコケムシ類の群



体の上で発見されることが多い。本州各地の浅い海に見られ、決して稀な種類ではない。

(広島県細ノ州にて 向井 宏撮影)

目次 「今月の海の生き物」ヒカリウミウシ

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 現在の活動と予定
3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
4. 連載エッセイ（11）

「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている」横濱康継

5. 事務局便り
6. 編集後記
7. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●沖縄子ども環境調査隊がハワイでウミガメ調査

沖縄タイムス社から派遣された「沖縄子ども環境調査隊」の中学生4人が、ハワイ島コハラ海岸で、地元の中学生といっしょにアオウミガメの生態調査に参加した。

ハワイでは野生のカメは厳重に保護されており、触れることも法律で禁止されている。調査はアメリカ海洋漁業局の指導で特別の許可を得てアオウミガメを一時的に捕獲し、甲羅の大きさや体重を量り、標識を取り付けて海に放した。今後は標識を元にカメの成長過程が調査される。参加した子供たちの感想は、「初めは言葉がわからずに戸惑ったが、最後は身ぶり手ぶりで意思疎通ができた。ハワイではカメの保護にたくさんの人がかかわっている」「あたり前のように野生のカメがたくさんいて驚いた。貴重な体験になった」。

帰ってきて沖縄の海をどう守っていくか、子供たちに期待したい。

【近畿】

●ウミガメ 11 頭が産卵 1121 個 長雨でふ化に影響

和歌山県串本町での7月のウミガメ産卵状況を保護団体の「串本海亀を守る会」がまとめた結果によると、12頭が上陸、そのうち11頭が合計1121個の卵を産んだ。梅雨が長かった影響でふ化が遅れており、ふ化率も悪くなるのではないかと懸念されている。

昨年は同時期までに、計26頭が2949個を産卵しており、雨が少なかったことなどから、ふ化率も高かったという。昨年は8月10日ごろからふ化が始まったが、今年はまだない。同会は、台風や低気圧通過など高潮の影響から卵を守るため、ふ化場へ卵を移して保護している。

●明石海峡で沈没船の油、抜き取り開始

兵庫県明石海峡で昨年3隻の船が衝突して沈没した。水深80mの海底に沈んだ貨物船「ワールドリーダー号（1466トン）」には燃料タンクなどに30～40トンの重油が残っており、海洋汚染が心配されていた。兵庫県・神戸市・明石市・淡路市などは、13日から9月半ばまでの予定で重油の抜き取り作業を始めた。

●若返り3回 ベニクラゲ実験で世界初

和歌山県白浜町の京都大学瀬戸臨海実験所の久保田信准教授が、「不老不死」を発見したベニクラゲの飼育・若返り実験で、同じ個体のクラゲを3回にわたって若返らせることに成功した。世界で初めての例だという。久保田准教授は「若返りのメカニズム解明に近づく基礎的な知見が確立できた」と話し、近く学会誌に発表する予定。

実験に使ったのは沖縄産のベニクラゲ。今年5月の採集直後に1個体が退化をはじめ、肉団子状に変化し、ストロン（走根）をのばした後、若い世代のポリプを形成して若返りした。その後、白浜で飼育を継続していたが、7月に2回目の若返りを果たし、8月に入って三度若返った。

【ベニクラゲの若返り現象】クラゲ類は成体が有性生殖し、受精卵から育ったプラヌラ幼生が、岩などに付着して走根を伸ばし、そこから若い世代のポリプ個虫が無性生殖で増えていく。普通、有性生殖後の成体は死を迎えるが、ベニクラゲは死なずに肉団子状になり、再び走根を伸ばしポリプへと若返る。このポリプがクラゲ芽を形成し、やがて若いクラゲとして分離して泳ぎ出す。このサイクルを繰り返すことから「不老不死」と言われる。

●巨大なノコギリガザミを捕獲 田辺湾

和歌山県田辺湾で巨大なノコギリガザミの雄が捕獲された。大きさは重さ1.8kg、甲羅の幅は20.5cm、はさみ脚を伸ばると1mにもなる巨大なもの。水深1.3m付近の浅瀬で見つかったという。田辺湾ではノコギリガザミはしばしば見つかっているが、これほど大きいものは初めてという。

●ダイバーが串本の海中で生物の数定点観測

和歌山県串本町で潜水を楽しむダイバーたちが環境問題に取り組む団体「リーフチェック串本」を作って海中の定点観測を始めて10年が経過した。この10年間でもっとも変動が大きいのはサンゴ類で、オニヒトデの食害や台風などの災害の影響で減少していることが分かった。関係者は「10年間で生物の数が大きく変動していることが分かったのが一番の収穫だった」と話している。

調査は、田子沖約400mにある双島付近の水深10mと3mの二ヶ所で行っている。20種の魚類、6種の貝類、2種の甲殻類、10種の棘皮動物やサンゴ類の出現個体数を調べた。増加したのはウニやナマコなど。水温の上昇などでオニヒトデの増加も続いているという。

そのために北上が伝えられているサンゴだが、オニヒトデの食害も増加しているためと、台風の被害の増加によってサンゴは結局むしろ減少しているという。

現在、約 20 名のダイバーが調査に参加しているが、もっと多くのダイバーに参加して貰いたいと「リーフチェック串本」では期待している。

【中四国】

● 渋川港でウミホタル観察会

岡山県玉野市渋川の渋川港で、「親子でウミホタル観察会」が開かれた。「ちっこう、うの子ども楽級」が主催したもので、築港小学校、宇野小学校の子どもや保護者ら約 50 人が参加した。高校生物の教諭が指導を担当し、参加者は蓋に穴を開けた容器に餌を入れたトラップを海に浸けてしばらく待った後、海水と一っしょにウミホタルを採集した。子供たちは普段見たことないウミホタルに興味深く観察していた。ウミホタルが発光すると、子供たちから「うわあ、光った」と歓声が上がった。

● 有明浜の生き物探せ／親子 60 人が干潟観察、採取

香川県観音寺市の有明浜で、「香川の水辺を考える会」と笠田高校は干潟の生物観察をテーマにバーチャルミュージアム「香川自然博物館」を開催した。同会は自然環境保全のための活動を行っており、バーチャルミュージアムでは、自然との共生や環境問題への関心を高めるのが狙いで過去 4 回開催されてきた。今回は、夏休みの自由研究を兼ねた親子らが約 60 名ほど参加した。有明浜で貝やカニ、エビ類、魚などの生き物を観察し、採集したのち、香川大学の教授による指導で名前を調べたり、行動を観察した。今年は昨年多くのスナモグリが確認されたにもかかわらず今年はまったく見つからなかった一方、スナガニ類が多く採集されていた。

【九州】

● タコやウニに触って 海の体験フェスタ

佐賀県唐津市の唐房にある佐賀県玄海水産振興センターで、玄海の海まるごと体験フェスタ」が行われ、親子連れなどが海洋観測を体験したり、タコやウニに触って、解剖をするなどして、唐津の海への理解を深めた。

用意した「タッチプール」には、タコやカブトガニ、ウニなどが飼育されており、子供たちが触って歓声を上げていた。

● 赤潮で養殖ブリに被害 93 万匹が死ぬ

鹿児島県の北部、八代海ではシャトネラ・アンティーカーによる赤潮が発生し、鹿児島県内で養殖していたブリに被害が出ている。これまでに 93 万匹が死に、過去 20 年間で最大の被害となった。

鹿児島県の水産振興課によると、9日の調査で、シャトネラの細胞数が最低致死濃度を超えたのは長島沿海の1地点だけで、赤潮被害は収束しつつあるという。

●天草のダム計画の差し止め訴訟 地元住民

熊本県が天草市河浦町に県営の路木ダムを建設している問題で、ダム建設に反対している地元住民は、「県が虚偽の洪水被害をでっちあげて計画した違法な事業である」として、公金支出差し止めを求めて提訴した。県の路木川整備計画では、「1982年7月の豪雨で100棟が床上浸水した」と記述しているが、そのような証拠はなく、被害をでっちあげてダムの建設を計画したとしている。川辺川ダムの建設計画に反対を表明した蒲島知事だが、前知事が撤去を決めていた荒瀬ダムを白紙に戻すなどダムへの対応では一貫した態度をとっていない。天草にもダムを建設しようとする姿勢は変わっていない。

【沖縄】

●辺野古アセス サンゴと景観の2委員辞任

米軍普天間代替施設の辺野古建設に係って沖縄防衛局が提出した環境影響評価準備書は、現在沖縄県の環境影響評価審査会（津嘉山正光会長）が審査を行っているが、サンゴと景観の専門家2人が6月に委員を辞任し、専門家不在のまま審査が続けられている。代替りの専門家が見つからないなど事務局は対応に苦慮しており、9月末にも答申をまとめる予定だが、今後の審査への影響が懸念されている。委員の辞任の表向きの理由は「多忙」と「健康上の問題」であるが、国からの圧力の下で、審議をすることに苦痛を感じた可能性もある。代替りの専門家が見つからないのも、そのせいかもしれない。

環境団体からは、アセス準備書で書かれているサンゴの保全措置（埋め立て区域に生息するサンゴ類の移植や大浦湾海域の作業ヤードを取りやめるなど）では、大浦湾のサンゴ類の生息場所の一部消失に対する保全措置としてはとても十分とは言えないと指摘されている。

これまで審査会は3回開かれたが、7月30日にサンゴ調査をしている市民団体（リーフチェック）が問題点を指摘した以外に、サンゴについての審議はなされていない。

桜井国俊沖縄大学学長（環境学）は「専門家がいまま、形だけ整えて知事に答申するのは非常に問題がある」と指摘した。

2. 現在の活動と予定

●海に行ったら砂浜海岸生物調査をやりましょう

砂浜海岸生物調査をいっしょにやりませんか

海の生き物を守る会では、昨年からNPO法人OWSと共同で全国の砂浜海岸生物調査を実施してきました。引き続き今年も砂浜海岸生物調査を行っています。日本の砂浜を生き物のために取り戻そうと計画された調査です。調査は誰にでもできる方法で計画されていますので、少しでも多くの方が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は38枚、全国23ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2-3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●水中スケッチ画家 近藤ちひろ個展&トーク

個展「楽園の神さまたちの唄」 入場無料

日時：9月19日（土）～27日（日）10:00~19:00

トーク&ライブ（前売り 1000円、当日 1500円）

日時：9月19日（土）18:00~

場所：経王寺本堂（東京都新宿区原町 1-14）<http://www.kyoouji.gr.jp>

問い合わせ先：03-3341-1314

●OWS 第11回 海辺の自然教室 参加者募集

「伊豆大島ネイチャーツアー ～火山島の自然と生きもの～」

ナチュラリスト・ガイド:小川修作（エコツアーショップ「シーサウンド」代表）

人類が誕生する遥か昔の太古から長い噴火の歴史とともに形成されてきた伊豆大島。今なお数十年ごとに噴火を続ける火山島には独特な生態系と、この地ならではの生きものたちが生息しています。このツアーでは火山活動が作り出した特殊な環境とそこに棲む生きものたちを訪ねて、OWSネイチャーガイドがご案内します。

開催日 2009年9月12日（土）～13日（日） 1泊2日

開催場所 伊豆大島

集合場所 大島高速船到着港（岡田港または元町港）

プログラム概要（2日間）

三原山溶岩台地（裏砂漠）観察、島海岸&砂の浜海岸の生き物観察、トウシキ海岸での生き物観察（スノーケリング）、クラフト など

対象者 小学3年生以上、スノーケリング経験者

参加費（予価） メンバー：16,000円／一般：18,000円 ※宿泊費・交通費は別途

募集人数 8名（最少催行人数4名）

お問い合わせ・お申し込み OWS事務局まで、E-mailまたはお電話にてご連絡下さい。
(TEL:03-5960-3545)

※詳細はOWSホームページで。大島までの交通・宿については、お問い合わせください。

●KID'S SURF CONTEST at 志田下

大会目的

一宮町釣ヶ崎海岸（志田下）はサーフィン道場と呼ばれ、多くの有名プロサーファーや
トップアマチュアを生んできたサーフポイントであり、日本でもトップクラスのビーチ
ブレイクとして知られています。そんな志田下で県内外から子供サーファーと保護者が
集まりサーフィンを通じ訪れた子供達に海の大切さや人と自然との関わりを体感すると
共に、各自の情報交換や交流を深め、海への関心を高める事を目的としています。

日時 2009/8/23/sun

場所 千葉県一宮町釣ヶ崎海岸（志田下）雨天決行

エントリー費 無料

エントリー方法 エントリーフォーム記載の上 FAX をお送り下さい。FAX 0475-42-8673

クラス 小学生1年～3年の部 16名

小学生4年～6年の部 16名

中学生の部 20名

イベント プロサーファーによるエキシビジョン／サーフレクチャー

消防士サーファーによる海難事故に対する応急処置などの指導 他

今回優勝者には某雑誌社掲載プロサーファーとの SURF TRIP に行けちゃいます！！

定員になり次第閉め切らせて頂きます。

●海水浴場復活シンポジウム「葛西・西なぎさを泳げる海にしよう」

日時：8月30日（日）11:30～15:40

場所：タワーホール船堀

入場料：大人 800円 小中学生 無料

主催：NPO法人 ふるさと東京を考える実行委員会

問い合わせ先：03-3869-1992 FAX:03-3688-5955

内容：こども海の作文・絵画・工作作品展示。

シンポジウム：海水浴場復活プロジェクト 東京湾の海の生き物たち

●生物多様性条約1年前プレシンポジウム

～生物多様性 2010 年目標と日本の経験～

日時：2009 年 9 月 6 日（日）10 時～18 時（9 時半受付開始予定）

場所：東京大学 弥生講堂一条ホール

言語：日本語・英語（逐語通訳の予定）

参加対象：生物多様性条約 2010 年目標に関心のある一般市民, NGOs, 政府機関, 研究者等

参加費：500 円（資料代として）

●日本海洋政策研究会全国大会論文募集、9/10〆切

来る 12 月 6 日(日)東京大学で将来の海洋政策学会を目指す研究会の初の大会が「総合的な海洋政策の形成を目指して」をテーマに開催予定で、現在発表論文募集中です。9 月 10 日（木）〆切。1,000 字以内のアブストラクト原稿で審査。海洋基本法・基本計画に掲げられている基本的施策（12 項目）のいずれかに関連したテーマを選定、タイトルは自由。採択の場合は当日向けプレゼン資料を作成して発表。

http://www.sof.or.jp/jp/topics/pdf/09_05_01.pdf

【中四国】

●上関原発埋立て認定取消請求「自然の権利」訴訟初公判

日時：8 月 19 日(水) 13:30～

場所：山口地裁 公判終了後、報告会

場所：中市コミュニティホール（083-925-1617）に移動して開催

長島の自然を守る会 代表 高島美登里 midori.t@crocus.ocn.ne.jp

747-0063 山口県防府市下右田 387-14 Tel&FAX 0835(23)1891. 携帯 090(8995)8799

●親と子の「生物探検」～新舞子西浜で

日時：8 月 22 日(土) 10:00～17:00

場所：集合 たつの市御津町黒崎 新舞子西浜 民宿カトレア

講師：和田太一さん（大阪自然観察指導員）

参加費：500 円（親子 1,000 円） 申込期限：8 月 16 日

主催・連絡先 播磨灘を守る会（Tel079-322-0224）

【沖縄】

●市民による海草調査 沖縄ジャングサウオッチ 2009<9 月調査>

□9 月 5 日（土）名護市嘉陽の海草調査

11:00 嘉陽・松浜荘駐車場に集合、16:00 終了予定。

【内容】砂浜からシュノーケリングで海に入り、水深 1～2 m の場所でラインを引きながら海草調査を行います。初めてご参加いただく方には、現地で初心者講習（海草の見分け

方と調査方法のレクチャー)を行います。昼食は各自で済ませてお越しく下さい。

□9月 6日(日) 名護市辺野古の海草調査

11:00 汀間漁港に集合、17:00 終了予定。

【内容】 2隻の船で汀間から辺野古の調査海域に移動し、水深1~3m程度の場所でシュノーケリングによる海草調査を行います。昼食は各自で済ませてお越しく下さい。

宿泊: 調査期間中の宿泊を希望される方はお知らせ下さい。素泊まり1泊3,000円(実費)です。食事は付近の食堂・売店を利用します。

■ 申し込み・問い合わせ先 ■

シーグラスウォッチ・ジャパン 河内直子 〒088-1114 北海道厚岸郡厚岸町湾月1丁目47

電話:0153-52-0256 (FAX 兼) 携帯:090-4622-3802 メール:nkouchi@seagrasswatchjapan.com

□ 沖縄での問合せ: 鹿谷麻夕 901-0603 沖縄県南城市玉城字百名1147-502

電話:098-948-1417 (FAX 兼) 携帯:090-6862-5219 メールアドレス:shika@tedako.net

4. 連載エッセイ(11)

自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている?—
横濱康継(南三陸町自然環境活用センター長)

第四章 余生を生きる

余生とは

子育てや仕事に全精力を投入するような生活のあとに訪れる余生に、多くの人は大きな開放感を味わうと同時に、戸惑いも覚えるようである。しかし私自身は、定年退職直後から安定した身分で「チビッコ研究所」を自由に運営出来るという、夢のような生活に入ったために、開放感も戸惑いも感ずるいとまもなく、四年間を突っ走ってしまった(二〇〇三年現在)。

本書は一人前に余生に入ったつもりで書かせていただき、前章までで完結したつもりになっていたのだが、半年も原稿を寝かせ、その間に何度も読み返す一方、余生に関する新聞・雑誌の記事やテレビの番組などに目を向けるようになって、私は井の中の蛙であったということに気づいた。

前章の最後の部分で、ヒトの社会でもユズリハに象徴されるひと株の植物体のように、新旧交代が合理的に行われなければならない、などと記したが、これも世間知らずの生物屋のひとりごとと片づけられてしまいそうな気がしてきた。

私達の社会における理想的な新旧交代の前には、やはり死生観という重い問題が横たわっていると見えそうである。また私のような老人はユズリハの古い葉にならって余生を子孫達に捧げるべきであるとも記したが、その具体的な内容はほとんど示さないままだった。

余生に入った人間の強みは「命を賭ける」ことができることなのだが、二十一世紀に入った人類の前途には、命賭けで挑戦しなければならない地球規模の難題が立ちはだかっている。そして国内では、失政による財政破綻と経済の大混乱が否定しようもない現実と化し、人の内面つまり心も、政治家や官僚から一般の国民そして青少年に至るまでの各層で、未だかつてないほどに荒廃が進んでいる。

幕末の大混乱期に維新を担ったのは十代・二十代の若者達だったが、それから一五〇年ほどを経て、かつてのエネルギーを失ってしまった青少年達に代わって、老人達が命を賭けて「維新」を遂行する時代が到来したような気がする。もしそうであるなら、私達には余生の過ごし方に戸惑っている余裕など残されていないのである。

多くの人は、思春期に「自分はなぜ生きているのだろうか？」と思いながらも、その解答を見出せないまま子育てや家族を養うための仕事を始めてしまうが、それらから開放された後の余生こそ、思春期の疑問への解答を見出すために残された貴重な最後の時間である。そしてその解答を見出した時、私達は死生観を確立することができ、「老人は子孫達のために命を賭けるべきである」ということが明確に悟れるのではないだろうか。

童心に還る

思春期の頃の疑問に再び直面するには、少なくともその頃の気持ちに戻る必要があるのだが、可能なら更に十歳以上若返ったほうがよい。なぜなら、解答の手がかりは自然観察によって得られるはずであり、そして自然界で謎を見出しさらに解こうとする探究心は幼いうちほど旺盛だからである。

子育ての経験の持主は、物心のつき始めた頃からの子供の質問に手を焼いたという記憶があるだろう。「空はなぜ青い？」あるいは「夕日はなぜ赤い？」などという疑問は、中学生になるとほとんど抱かない。今日の我が国では、小学生でも抱かなくなってしまうのかもしれないが、それは理由がわかったからというわけでもないだろう。しかし幼児達は遠慮なしにそんな疑問をぶつけておとな達を困らせる。

「空は青く夕日は赤い」という現象には、海が青く見える現象と共通の原理が働いている。本書第二章中の「多彩な海藻達が語る地球環境の歴史」に、太陽光の成分中で青色光が最も散乱しやすいため海は青く見えると記したが、空気中でも青色光が最も散乱しやすいので空は青く見えることになると言える。しかし遠慮を全く知らない子供から、さらに「青い光はなぜ散りやすいの？」などという質問を浴びたら、そろそろ私もお手あげであ

る。

物体を空中でどんな力も加えずに手放すと必ず地面へ向かって垂直に進む。そんなことはあたりまえと思われているこの「落下」という現象に、おとなでありながら「なぜ？」と思ったニュートンは天才だったのだが、物心のつき始めた幼児の目にも「落下」は不思議な現象と映るのだろう。ようやく坐れるようになった頃の私の子も、こたつの上に置かれたおもちゃを手前に落とすという動作をくり返していたが、その行動の謎がいま解けたような気がする。

物心がつき始めた頃には不思議だった「落下」という現象も、くり返し眺めながら成長してゆくうちに、あたりまえの「事実」になってしまう。科学の分野での天才は、おとなになっても幼児の心を失わない人物ということになりそうだが、童心に還れば、家の中にも外にも「不思議」があふれるほどに存在することに気づく。そしてそれらを解くには時間と労力をかけなければならないのだが、その過程で感ずる楽しさと「不思議」が少しでも解けた時に感ずる達成感こそ、ヒトという動物に特有の心の動きと言える。

私の身近にも、定年退職後に童心に還って行った研究で権威者達を驚かせるような「発見」を成し遂げた人が居る。小学校の校長先生だったのだが、ある大学の大学院に入学して、海藻についての研究を始め、「ホンダワラ類に属するヤツマタモクの浮袋には、中の空間をたてに貫く糸が存在する」という事実を発見した。

ホンダワラ類は、枝々に無数の浮袋を付けて、しなやかな体を水中に立てている仲間だが、ほとんどのホンダワラ類が枯れて小さな芽生えになってしまう夏にも、ヤツマタモクはかなり大きく成長していて、その浮袋は大豆より大きくて目立つ。子供の頃の海水浴で海藻の浮袋をつぶして遊んだ、という思い出の持主は多いだろうが、その海藻がヤツマタモクであった可能性は大きい。

ヤツマタモクの浮袋の中に糸が存在するという事は、子供の遊びでも発見できるはずだが、子供達は、それが世界中の学者の誰も知らなかった「新事実」なのではないか、などと思うわけがない。一方権威者達は、もう子供達のようにホンダワラ類の浮袋をつぶして遊ぶことはなく、まだ多少のいたずら心の残っている若手の研究者や学生が、ヤツマタモクの浮袋をつぶして、糸の存在に気づいたとしても、まさかそれが「新事実」であるとは思わない。

元校長先生は、長年一緒に過ごした小学生と同じ心を持ったままだったのだろう。また小学生でも気づきそうなその事実を「新事実」であるか否か確認することにした指導教官も、非常に柔軟な頭脳の持主だったと言える。

世界中の文献を遠い過去にまでさかのぼって調べた結果、ホンダワラ類のどの種類についても、浮袋の中に糸が存在するという事実は見つかっていない、ということが判明して、元校長先生の発見は学会で大きな反響を呼んだ。髓糸と呼ばれることになったこの糸の存在は、ヤツマタモクの変種でも発見されて、この仲間を特徴づける貴重な手がかり（分類形質）としても評価されるようになった。

子供でも発見できそうな事実の新発見こそ大発見と言えそうであり、そのような発見は童心の持主にのみ可能と言える。童心の持主の元校長先生は、ヒジキとアカモクでも髄糸を発見し、研究結果を修士論文にまとめて、二年間の修士課程を終えたが、その後も他の大学の研究室に籍を置いている。好きな海藻についての研究を続けながら、学識豊かな教官から直接話が聴けたり、若い学生達と話合ったりできる環境が、たまたま魅力的なのだという。

全国の小学生に「将来の夢」を問うアンケートで、今年（二〇〇三年）は、男児が希望する職業として、「学者・博士」が「サッカー選手」を抜いて一位になったという。過去の調査でも、「学者・博士」は、第二位というランクを維持し続けてきたらしい。これも子供達にとって自然界での不思議探しや謎解きがたまたま魅力的である、ということの証拠と言えらる。童心に還って余生を送り始めれば、戸惑いを感じたり生き甲斐がないと嘆いたりしている暇などなくなってしまうにちがいない。（次号につづく）

5. 事務局便り：

- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひろも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
- 本会へのカンパをお寄せください。銀行口座は「ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会」へ。

6. 編集後記

8月も半ば、暑さに閉口する季節になりました。みなさんは海に行きましたか？今日は京都では五山の送り火。夏も早くも半ばを超えたようです。今年も異常な気象現象に翻弄された日本でした。海でもおそらく異常な現象が起こっているにちがひありません。海の生き物が海水の温度上昇によってどのような影響を受けるかという研究もあまり進んでいるようには見えませんが、温度上昇を起こしている要因は、私たちの生活そのものです。生

活を見直して、温暖化が海の生き物に致命的な影響を与える前に、健全な海を取り戻したいものです。それが実は私たちの子孫が健全で安全な生活をおくることができることにつながっているのですから。(宏)

7. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円/年、団体 20,000 円/年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp (向井) まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

事務局員も募集中！

事務局を手伝っていただける人を探しています。パソコンでメールが使える環境にあれば近くにいなくてもお手伝いいただけます。ただし、無収入ですので海の生き物の保全・保護に関心とボランティア精神のある方。

メールマガジン『うみひろも』第45号 2009年8月16日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町 23-1 グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501 メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会

